

二〇世紀朝鮮史の国際環境

はじめに

この講演では相互連関する次の三つのことを話します。

第一に、朝鮮をめぐる二〇世紀の国際環境はどのようなものであったか。これは第二章で扱います。第二に、二〇世紀の国際環境は朝鮮史にとってどのような意味をもったか。これは第三章で扱います。第三に、二〇世紀の国際環境はどう認識されたか。これは第一章と第四章に分けて説明します。

この講演の対象についても次の点を予め話しておきます。第一に、二〇世紀を中心としますが、二〇世紀の国際環境

の特徴を理解するためにその前の時期も簡単に探ってみます。このような歴史的考察の上で二一世紀を展望します。

第二に、国際環境の中で東北アジア三国の関係、その中でも日朝関係に重点を置きます。第三に、国際環境を経済史的観点を中心として考察します。これは講演者の専攻のためだけではなく、近代には経済的關係が特に重要な意味を持つようになったからでもあります。勿論、外交軍事的関係と文化的交流も重要で、これらの側面は相互連関しています。そこで、可能であれば総合的な観点でこの課題を扱うことにします。

李 憲 昶

一 国際環境を眺める観点

朝鮮人が国際環境を眺める観点はかれらの所屬する世界の主導的価値判断に影響を受けました。これは文明と歴史を理解する仕方と密接に関連しています。近代に入つてその観点は三回の転換を経ました。

(1) 第一段階…文明と野蠻の国際関係論

一八七〇年代まで朝鮮は中華世界秩序に深く編入されてきました。周知のように、前近代中国の世界観は華Ⅱ文明と夷Ⅱ野蠻を峻別しました。中国の明が滅亡した一六四四年以降、朝鮮は自分が文明の中心地であると自負しました。これに反して、一八世紀には清を依然として先進文明であるとして学習の対象とする北学派が出現しました。北学派に属する洪大容は西洋の地球説を受け入れて、中華を中心とする位階的世界秩序観を克服したこともあります。

ヨーロッパで近代文明が成立して以降、未開の前近代文明から近代文明へ進歩するとみる啓蒙主義歴史観が成立しました。ヨーロッパ文明が中国文明より優越することを認定すれば、華夷観をもっているひとが、それと親和的な啓

蒙主義文明観を受け入れることはあまり難しくはなかったでしょう。この新しい文明観を東北アジア三国の中では日本が最も迅速に受け入れました。福沢諭吉は一八七五年に発売された『文明論之概略』で、欧米を「最上の文明国」、アジア諸国を「半開の国」、アフリカを「野蠻の国」と規定しました。かれは、文明—半開—野蠻が相対的な名称であるが、「人類が経過すべき段階」と見ました。かれは精神を文明の核心的要素とみなしましたので、半開と野蠻が人間精神のせいであると考えました。

朝鮮の最初の日本留学生である兪吉濬は一八八六—九二年の間に執筆した『西遊見聞』で、開化の等級を開化—半開化—未開化Ⅱ野蠻と分けました。かれは福沢諭吉の文明観を受け入れた開化派であります。朝鮮の一八八〇—九〇年代は華夷観と啓蒙主義文明観の闘争期でありました。二〇世紀初めには新しい文明観の勝利が確固となりましたが、この時点で朝鮮は植民地に転落させられました。東アジア文明の中心地としての自負心に慣れていた中国人は、朝鮮人よりもヨーロッパ文明の優越を認定するのが難しく、梁啓超がやっと一八九九年の「自由書」で啓蒙主義歴史観を披瀝しています。

華夷観は文明国が野蠻国と共存しながら道德的感化によつて文明を伝播すると見た反面、新しい文明観は一方では文明国の野蠻国に対する文明化の使命を掲げ、他方では社会進化論を通じて文明国による未開国の支配を適者生存の結果と正当化しました。広大な旧中国は対外進出の関心が弱かつた反面、ヨーロッパと日本の近代国民国家は対外進出の熱望が強烈でありました。

日本では福沢諭吉が啓蒙主義文明観のみならず文明化の使命を先駆的に主唱しました。かれは日清戦争を文明と野蠻との間の戦争とみなし、日本が朝鮮に文明流の改革を促すためのものであるといたしました。かれは初めアジア諸国家が協力して西洋諸国家の侵略を守り防ごうという意見を持ちましたが、日本の明治維新のような変革を追求した一八八四年甲申政変の失敗に失望し、一八九五年に日本がアジア東方の……隊伍を脱して西洋文明国と進退を共にしようとする「脱亜入欧論」を執筆したことがあります。植民地期まで日本人の国際環境を眺める視角は福沢諭吉のこのような文明観をもとにしていました。

古代にアジアがヨーロッパより先進的であつたことを知つたヨーロッパ人は、近代では逆に後進的になつたアジ

ア社会の停滞論を作りました。この史論はヨーロッパのアジアに対する文明化の使命観を支援しました。日本古代国家の成立以前に朝鮮が先進的であつたことを知る日本人は同じく朝鮮史停滞論を提起しました。これは文明化の使命論と共に日本の朝鮮支配を正当化する論理として働きました。即ち、停滞した朝鮮に対する植民地支配は近代文明の恩恵を施す過程とみなすことができる、といったものがあります。

(2) 第二段階…抑圧と収奪の国際関係論

華夷観を固守する朝鮮の衛正斥邪派は欧米の洋夷を利欲を追求する侵略勢力とみなしました。それで、かれらは洋夷との貿易さえ否定的に評価しました。啓蒙主義文明観を受け入れた開化派はもとも近代世界の侵略性に対する警戒心が弱かつたのですが、その中にも万国公法秩序の下に弱肉強食の適者生存競争という現実を直視する人が増えました。かれらは日本による朝鮮の主権侵奪が自由、正義及び平和という人類の普遍的価値を損傷すると批判しましたが、帝国主義がわかりませんでした。

(半)植民地化を文明化の使命として正当化するパラダイ

ム paradigm の克服のための刺戟は主にマルクス・レーニン・Mark-Lenin 主義から提供されました。マルクスはイギリスのインド支配が古いアジア社会を滅ぼす破壊の使命、そして西欧的社会の物質的基礎をアジアに据える再生の使命を持ったとみなしました。⁽²⁾ マルクスは文明化の使命を重視しましたが、彼が提示した、国内での搾取と抑圧の論理は国際関係に援用されるようになりました。レーニン等の帝国主義論は、帝国主義は経済的利益を一方的に追求するとして、ヨーロッパ列強の対外進出を批判的に認識する視角を提供しました。そして、帝国主義側が自分の一方的な利益を求めるために抑圧と収奪をはばからないという見方が提起されるようになりました。第一次大戦後、米国大統領であるウイルソン Wilson は民族自決を主唱し、レーニンは被圧民族の解放闘争を支持しました。

民族自決論と帝国主義論は被圧民族の解放運動を觸発しました。一九一九年におきた朝鮮の民族的反日運動である三・一運動は民族自決論の影響を受けました。朝鮮の知識人は自強論的民族主義を鼓吹するために社会進化論を広く受け入れましたが、植民地化された後には植民地化を適者生存の結果として正当化する社会進化論を克服するため

に、社会主義を受け入れるようになりました。⁽³⁾ 植民地期において日本による文明施恵論が圧倒する中で、朝鮮人学者は朝鮮人産業の萎縮等という植民統治の副作用を議論するようになりました。一九四五年における日本帝国主義からの解放は植民地期を帝国主義収奪史で眺める視角への転換をもたらしました。一九一〇年代の土地調査事業は国有地の創出のための土地収奪の過程、一九二〇年代の産米増殖計画は米穀収奪のための農政、一九三〇年代の軍需工業化は資源と労働力の掠奪過程と理解されるようになったのです。一九六〇年代からは朝鮮後期に資本主義萌芽等の近代志向的要素が現れたとする内在的発展論が台頭しましたが、この史論は近代志向的要素が帝国主義の侵略と支配によって歪曲、圧殺されたとする視角を提供しました。⁽⁴⁾ こうして(半)植民地化を文明化の使命とみなすパラダイムの克服のための史論が調いました。

一九六〇年代には、南・北朝鮮で共に朝鮮王朝時代を説明する内在的発展論と植民地期を説明する帝国主義収奪論が通説になりました。一九七〇年代からは従属理論が第二次世界大戦以降の南朝鮮⇨韓国の国際関係を説明する論理として影響力を強めました。従属理論は南米の低開発

(Underdevelopment) が先進資本主義との不平等な取引関係に因るといふ観点に基づいて成立しました。内在的發展論と帝国主義收奪論は解放後の韓国史を説明する従属理論とびつたり結合するようになったのです。⁽⁵⁾

第一段階と第二段階の国際関係論は民族主義に関わっていません。帝国主義国は後進国に進出してこれを支配するために、民族主義を利用して国民的支持を呼び集めました。帝国主義の侵略に抵抗した地域においては、自分のアイデンティティー Identity を確立しようとする中で民族主義が台頭し、それは抵抗勢力の結集に利用されました。民族自決論は被圧地域の民族主義に対する国際的配慮でありました。朝鮮における民族の形成過程に関しては論難がありますが、朝鮮末期における国家存亡の危機の中で民族主義が形成されたときみなすことに対しては別に異論はありません。この民族主義があつたからこそ、一九一九年の學族的反日運動が可能でありました。この民族主義は内在的發展論、帝国主義收奪史論及び従属理論の普及を支えました。

(3) 第三段階…近代世界の形成・深化論

マルキシズム Marxism に対抗する主流経済学の史論と

して冷戦時代に成立した成長史学は植民地期を開発の観点で眺める傾向を持っていました。二〇世紀後半に、世界は資本主義の繁栄と社会主義の没落を目撃し、世界の学界では経済史を含めて主流経済学がマルクス経済学を圧倒するようになりました。

成長史学では近代を年平均三%以上の持続的成長の時代と把握しましたが、一九七〇年代に溝口敏行と徐相喆は戦時統制期を除く一九四〇年以前の植民地期の平均成長率が三%以上と推計しました。⁽⁶⁾ その後のより精確になった推計でも、そのような結論は変わりませんでした。⁽⁷⁾ この推計は植民地期開発論に決定的な力を与えました。

一九八〇年代後半の現実には朝鮮史学の新しいパラダイムへの転換を促進する重大な力として働きました。低ドル＝円高・低金利・低油価に支えられた一九八六～八年の間の三低好況期に、多額の貿易黒字が生まれ外債問題が解消されました。一九八七年韓国では民主化が勝ち取られました。その背景には経済発展があつたという認識が広がっています。このような韓国の経済発展は従属理論の現実的根拠を剥奪するようになりましたし、さらに植民地期を解放後の経済発展の前史として接近する学風を台頭させました。

一九八〇年代末から東欧の社会主義国とソ連が崩壊し、一九九〇年代における北朝鮮の経済危機が知られたので、左翼性向の学者さえも次第に北朝鮮に対する体制の優位を認めるようになり、南朝鮮＝韓国の未来を樂觀するようになり、韓国では独裁体制の下に社会主義に対する情報が遮断されたことがむしろマルキシズムの学界に対する影響力を長く存続させました。これは一九八〇年代まで強まりましたが、一九八〇年代後半以降の国内外の現実の変化によって一九九〇年代から急速に弱まりました。マルキシズムの影響力が弱まる一方、経済史学界では成長史学などの主流経済史学が次第に影響力を強めるようになりました。

解放後に韓国は米国主導の世界体制に編入されましたが、従属理論はそれを不幸とみなしました。しかし、従属理論が影響力を失うようになった一九九〇年代からは、それが韓国の経済・政治発展を助ける国際環境であるとみなす見解が広がりました。一九九〇年代以降の韓国経済史学界では、成長史学等の主流経済史学がマルキシズムを圧倒するようになった中で、植民地期を開発期ないし近代化期とみなす観点が台頭して、影響力を増やしつつあります。この

植民地近代化論は帝国主義収奪論の論拠が不十分であったと批判しました。帝国主義批判論の立場から植民地近代化論に対する強い反撥も勿論あります。また内在的發展論が朝鮮後期の発展を過大評価したという認識が広がりましたが、これは植民地近代化論を支えました。一九九〇年代以降、韓国はグローバリゼーション Globalization の波に深く編入されるようになりますが、その中で民族主義が弱まりました。そして、民族主義の影響が内在的發展論と帝国主義収奪論の客観的歴史認識を損傷したという批判も行われました。新しく台頭する史論によれば、門戸開放以降の東アジア三国の歴史は近代文明の導入過程であり、日本による朝鮮の植民地経験はその一環であったということになります。これは第一段階の文明史観に通じます⁽⁸⁾が、深化された理論と実証に基づいて主観的な価値判断の余地を一層減らすことができました。韓国では、まだ植民地期の理解を巡る対立は激しいものがあります。史論の転換は依然として進行しつつあるのです。

(4) 史論の進展のための提言

これから私の立場と観点を提示します。福沢諭吉、兪吉

濬等が認識した通り、門戸開放の当時、欧米文明と東アジア文明の間には著しい水準差がありました。そして東アジア三国が門戸開放以降に経験した最も重要な変革は近代化であると考えられます。人類史の二大変革は農業革命による農耕社会と文明の成立、そして産業革命などによる近代文明の成立でありました。近代化というのは政治的に民主化、経済的に工業化 (Industrialization)、社会的に市民社会の成立といえます。政治的・経済的・社会的近代化の革命的意義はいくら強調しても強調しすぎることはありません。帝国主義支配の下の植民地において近代化が進行したことは否定できません。そういう点で、門戸開放以降の東北アジアの歴史を近代化論よりうまく説明する理論がないと思われます。従って、国際環境を眺める第三段階の観点を基本とすべきであります。

私は第一段階の福沢諭吉流の文明史観に戻りたくありません。なぜならば、東北アジア三国は前近代において文明を発達させましたから、門戸開放以降の東北アジアの変化を集約する用語として文明化より近代化が適切で具体的であると考えられるためであります。植民地期の朝鮮において工業化を含む近代化が進展し、その経済成長率が年平均

三%以上で高かったという事実の確認は重要であります。そうだとしても、植民地近代化論に安住したくありません。その理由は次のものです。

第一に、帝国主義支配下の近代化の限界ないし費用は軽くなかったということです。工業資本のなかにおいて朝鮮人の比重が一〇%未満でありました。そして教育機会と雇傭における民族間差別等によって、技術者など朝鮮人高級人材の成長に差し障りがありました。中等・高等・大学校への朝鮮人就学率は一九三〇年代以降増えましたが、解放された一九四五年にあってもそれぞれ四・六%、三・二%、〇・七%にすぎませんでした。戦時期において日本人の徴用によって朝鮮人技術者が急速に増えましたが、一九四二年になっても朝鮮人は工業技術者の一八%を占めるのにすぎませんでした。朝鮮人は国家を治め社会を統合する経験を積むことができませんでした。植民地支配による無形の費用も軽くありませんでした。たとえば、個人的地位の向上努力が親日に結びついて葛藤を生み出し、解放後には植民地期の親日問題の論難に巻き込まれるということが起こりました。

第二に、植民地期の近代化が帝国主義からの贈り物とい

うよりは近代世界からの贈り物であるともみる必要があると思われず。近代は前近代と違って高い成長率を持続的に実現する時代で、世界市場の形成と同時に成立した近代文明の伝播力は前近代文明よりはるかに強かったのです。いちはやく近代化に成功して力強く成長する日本の隣国であるということは、朝鮮の近代化に大きな利点でありましたが、この利点を除くと、植民地支配自体が朝鮮の近代化に有利であったかは疑問であります。

第三に、帝国主義支配でなければアジアの後進国が自力で近代化する展望はなかったと断定したくありません。門戸開放以降の朝鮮の場合、日本には及ばなかったが、近代の変革を経験しました。そして近代化とは一方的に伝播される過程ではなく、後進国の近代化を受け入れる力量を考慮しなければなりません。先進技術を吸収する力量は社会的力量 (Social Capabilities) と呼ばれます。⁹⁾ アジアがアフリカより先に近代化の成果を収めたのは社会的力量の蓄積がより進展していたからであります。朝鮮が植民地化直後から三%以上の経済成長を達成したと推計されましたが、これは占領勢力の近代化作用だけで説明することは難しく、植民地化以前に蓄積された社会的力量に支えられた点を考

慮しなければなりません。

近代化の成熟が国内政治では個人の権利に基づく民主主義の進展であるとすれば、国際政治では国家主権の尊重される万国公法秩序であることができません。国家主権が蹂躪される地域において、民主主義が成立することは困難です。そういう点で、第二段階の国際関係論を受け入れる近代化論が要請されるのであります。一九一九年、ウイロンソンの民族自決主義を積極的に解釈して、朝鮮人は三・一運動を、中国人は五・四運動を起こして自主と独立を追求しましたが、これは(半)植民地人民の政治的力量をみせてくれました。¹⁰⁾

近代化は欧米文明のインパクト impact 或いは植民地支配を通じて短期間に完遂されるものではありません。欧米文明のインパクト以前の東北アジアには近代化の受け入れを準備する蓄積がありました。そのインパクト以降、工業化と民主化は長期に涉って進行し、南朝鮮と韓国は一九八〇・九〇年代に近代化の成熟を成し、中国は二〇世紀末に工業化の成熟局面を迎えています。要するに、近代化というのは外部からの一方的な伝達によって成熟するものではなく、主体的に消化された後で成熟するものです。

以上の点で私は植民地化以前の朝鮮史の発展、植民地期の近代化、そして帝国主義の批判を総合的に考慮する歴史像を摸索しています。朝鮮は朝鮮王朝時代、開化期、植民地期、解放後の時代を経ながら段階的に自力的近代化の基盤を蓄積した後、朴正熙政府による時代の課題に符合する経済戦略の積極的な推進に支えられて、一九六〇年代に経済的跳躍 (take-off) を為し遂げたのであります。

二 国際環境の変化

(1) 開港⇨開国による国際環境の変化

東アジアの歴史上、国際環境における最大の変革は一九世紀中葉の欧米国家に対する開放による近代世界への編入でありました。中国が先に一八四二年の南京條約、日本が続いて一八五四年の日米親親條約、そして最後には朝鮮が一八七六年の朝日修好條約と一八八二年の朝米條約を起点として門戸を開きました。これらの事件は日本では開国、朝鮮では開港と呼ばれますが、中国では特別な呼称を持ちません。これは、三国がそれぞれこの事件に対し意味を与える強度の差を示しています。日本人が開国という用語を選択したことは、その文明的転換の意義を深く認識して

自国を変革させようとする態勢を整えた、ということの意味しています。中国は欧米との交流を制限はしましたが、朝鮮と日本とは違つて欧米に対する鎖国政策を断行しませんでした。長崎を通じてオランダと交流した日本は、そのような貿易港さえなかった朝鮮より閉鎖的ではありませんでした。ところで、鎖国下の日本は中国よりヨーロッパ文明を一層熱心に学習しました。朝鮮では朝鮮王朝の一三九二年創建を開国と表現しましたので、用語の重複を避ける意図があったと思われませんが、門戸開放の文明的意義に対する認識の社会的広がりには日本程には迅速で急激ではありませんでした。中国の反応が最も遅れましたが、文明の中心地という自負心が枷になったからであります。

これらの事件は、用語が異なっても、三国に対して同じく革命的な意味をもっていました。これは東北アジア三国をすべて近代世界体制に編入させた近代の起点という意味を持つています。二〇世紀の国際環境はこのような変革の延長線上にあります。国際環境の変革と結び付いて、各国において近代的变化が本格化しました。三国がすべて開放以前に市場の発達、社会の変動、思想の発達等という近代初期⇨近世的様相を経験しましたが、民主社会と産業革命

の展望は可視化されていませんでした。

開港が朝鮮の国際環境に対して持つ意味を考えてみましょう。開港は洋夷国家に対する鎖国を解除し、ひいては開放体制へ転換するものでありました。開港前、「人臣無外交」という東北アジアにおける古來からの外交原則が貫徹して、外交使節を経由しない民間の交流は許されませんでした。貿易も外交使節に伴って行うことが原則でありました。この延長線で外交使節に関わらない自国民の海上進出を禁止する海禁政策が採択されました。さらに朝鮮と日本は欧米国家との交流を全面的に禁止する鎖国政策を断行しました。朝鮮は、洋夷のように変わり伝統的規則に従わない明治政府の外交文書の接收を拒否しましたが、日本の武力示威によって一八七六年に日本と修交しました。ひいては一八八二年からは洋夷とみなされた米国・イギリス等と自発的に修交するようになりました。経済的には開港場での民間自由貿易が許されて、閉鎖的な朝貢貿易体制¹¹管理貿易体制が崩壊しました。朝鮮において海禁は最も遅くて一八八二年になって解除されました。

世界市場に編入されて自由貿易体制に転換するのに伴って、貿易が急増しました。表1に示されるように、一八七

六〜一九一一年の間に実質貿易額が一五倍以上に増えました。貿易総額の国内総生産(GDP)に対する比重は開港直前に一・五%前後でありましたが、一九一一年には一九%へと上がりました。開港後には初めて外国資本が流入し、外国企業が進出しました。

開港は中国中心の外交秩序を変革させる契機になりました。日本と違って朝鮮は中国と国境を共有しましたので、中国中心の外交秩序である朝貢冊封体制に深く編入させられていました。開港直後に朝鮮は万国公法の秩序を知るようになり、一八八一年中国に朝貢慣行の変更を要請しましたが、拒否されました。ところで、朝鮮が各国と條約を締結することは中国中心の外交秩序を動揺させることになりました。朝鮮政府が欧米国家との條約締結に積極的であったことには中国に対する牽制意識がありました。そして開港場における貿易の成長は朝貢冊封体制の実質的要素である朝貢使節に伴う貿易体制を無力化させました。ついに日清戦争で朝貢秩序が崩壊しました。

開港は朝鮮が中国文明圏から離れ洋夷の作った近代世界に編入されて、朝鮮人の文明観を転換させる契機になりました。開港以前にも朝鮮はヨーロッパの宗教と科学技術の

表1 開港以降における朝鮮の経済と貿易

年度	人口 (万人)	1人当りGDP (1990年ドル)	貿易額/ GDP(%)	貿易額の国別構成(%)		
				中国	日本	米国
1870	1,550	550	1.5	96	4	
1893	1,600	600	3.0	36.6	62.6	
1911	1,700	660	19.3	11.5	68.2	5.9
1940	2,433	1,200	53.5	11.9	82.1	1.1
1947	1,989	648	1	48.2	0.3	10.0
1962	2,642	1,122	21.7	0	27.6	48.6
1980	3,812	4,114	80.3	0.1	22.3	23.8
2000	4,726	14,343	65.0	9.3	15.7	20.1

注：1947年からは南朝鮮のみの統計。1911年以前の人口は権泰煥・愼鏞廈「朝鮮王朝時代、人口推定に関する一試論」(『東亞文化』第14輯、1977年)の推計を下向調整。1人当りGDPは1990 international Geary-Khamis ドルで表示。1948年以降の1人当りGDPは Angus Maddison, *The World Economy: Historical Perspective*, OECD, 2003; 1940年以前の1人当りGDPは Hun-Chang Lee, “When and how did Japan catch up with Korea?—A comparative study of the pre-industrial economies of Korea and Japan”, CEI working paper series, No. 2006-15, Hitotsubashi University. 貿易額は輸出と輸入の合計額である。1870年の貿易依存度は李憲昶「韓国における前近代貿易の類型とその変動に関する研究」(『経済史学』第36号、2004年)での推計。1893・1947年の貿易依存度は筆者の概略的推計。1911・1940年の貿易依存度は金洛年編、前掲書、11章、表1-1の推計で、国民総所得(GNI)をもって計算。1870年貿易の国別構成は姜徳相「李氏朝鮮開港直後における朝日貿易の展開」(『歴史学研究』第265号、1962年、p.10)。1910・1939年の国別貿易構成は1911・1940年の欄に表示。1893・1910・1939・1947年の国別構成は韓国貿易協会『韓国貿易史』1972年、pp. 135、175-80、228による。1893年日本・中国の貿易は欧米製品の中継貿易を含む。1947年中国の貿易に Hongkong (19.2%)を含む。1962年の貿易は多額の援助を含む。1962年貿易の国別構成と1962・1980年の貿易依存度は統計庁『統計でみる韓国の足跡』、1995年、pp. 319、329-331による。1980・2000年貿易の国別構成は関税庁「貿易統計年報」(<http://www.kosis.kr/>)による。

衝撃を受けましたが、地政学的要因、朱子性理学の強い支配力等によって中国・日本よりこれらに対する拒否意識が強くその理解度は低い状態でした。そういう点を考慮すると、一八八二年に政府が東道西器論の政策を闡明したこと

は遅い対応ではありませんでした。東道西器論は中国の主体西用論と同様に儒教倫理を基本としながら西洋の技術を学習し、さらに制度も制限的範囲で導入しようとする政策理念でありました。日本の明治維新のような変革を追求する変法開化派が一八八四年

に甲申政変を起こしましたが、失敗しました。彼らが求めた水準の改革は一八九四年の甲午改革で達成されましたが、この改革を推進した政府はすぐ倒れました。朝鮮政府の政策成果は明治政府の非常に優れた成果に到底及びませんでした。朝鮮の国家と社会は紆余曲折を経ながら次第に近代文明圏に深く編入されていったのです。文明観の転換は世界観の転換を伴うはずでありまし

た。一四〇二年に朝鮮で作られた『混一疆理歴代国都之図』は当時最も優秀な世界地図で、アジアだけではなくヨーロッパとアフリカを包括していました。その後、世界地図の製作技術はあまり発展することはありませんでした。

一七世紀初めから中国を通じて西洋式の世界地図が伝えられて、一部知識人の世界観が変わりました。しかし、社会の全般は華夷の天下観を固守し、東北アジア以外の地域に無関心でありました。開港以降、華夷の天下観が崩されて、全世界に対する社会的関心が初めて現れました。朝鮮最初の近代的新聞として一八八三年から発刊された『漢城旬報』は外国情報を重視して、その第一号には「地球図解」「地球論」「論洲海」という論説を収録しました。この論説に表れていますように、開港を起点として朝鮮は中華世界の内陸志向的国家から海洋も重視する地球的世界の国家へ転換し始めました。

開港を契機に朝鮮と交流する中心的な国家は中国から日本へ変わっていきました。開港以前、朝鮮は中国との交流のみに熱中しました。朝鮮が中国に次いで重視した国家は日本でしたが、朝鮮が日本に関心を持った主な動機は日本海賊を防ぎ止めるためであり、その副次的動機は非自給品

の輸入でありました。それで、一六三七〜一八七四年に中国への使節派遣は四七四回に達しましたが、一六〇六〜一八七四年に日本へ派遣された通信使は一二回に過ぎませんでした。

開港前の朝鮮王朝時代にも対日観において注目すべき変化がありました。一五世紀、日本使節を通じて日本経済が朝鮮より繁栄していることが報告されました。秀吉の朝鮮出兵を通じて朝鮮人は日本の強い軍事力を体験し、日本を訪問した通信使を通じて少数の学者は日本の文化発達を認めるようになりました。しかし、そのような認識は制限された範囲に局限されていて、日本との交流を進めようとする発想は開港前に広がりませんでした。一七世紀には日本銀の流入が急増し、一七世紀後半には朝鮮史においては初めて対日貿易が対中国貿易と対等になりましたが、一八世紀前半に日本銀の流入が急減しました。

開港から日清戦争までは日本と中国とが朝鮮に対等な影響力を及ぼしました。東北アジアの歴史上、二つの中心地が存在したのは初めてのことでありました。近代文明の威力をもって日本は中国と対等な中心地に浮上し、さらに中国を圧倒するようになりました。日本は日清戦争での勝利

と産業革命の成功によって東アジアの唯一の中心地になりました。一八八〇年の第二次日本視察団の報告以降、朝鮮は日本を近代文明の主な導入窓口としました。開港直前、朝中貿易と日朝貿易は各々三〇〇万円、一二万円程でありましたが、一八八一年頃からは対日貿易は対中貿易を超えました。開港以降、朝鮮の輸出対象国は圧倒的に日本でありました。輸入においては中国の比重が一八九三年に四九%となり日本と対等になりましたが、日清戦争の後に激減して一九一〇年には一〇%未満に下がりました。

開港を起点として朝鮮の歴史的舞臺は東北アジアに限らなくなりしました。後期新羅時代(六七六―九一八年)には佛教の学習のためにインドにいった僧がいますし、イスラム国家とも交易が行われました。勿論東北アジアを離れた新羅人は少数であり、東北アジア以外との貿易は微々たるものでありました。その後、次第に朝鮮人の外国進出が弱まり、交流の地域的範囲が縮小されました。開港以前の二世紀以上にわたって朝鮮は中国・日本以外の国家と交流したことがありませんでした。一七世紀以降、中国を通じてヨーロッパの科学技術が紹介され基督教が流入したことは注目すべきであります。だが、日本の蘭学のようなものは

ありませんでした。一八八〇年、朝鮮は歴史上初めて欧米国家と修交しました。朝鮮の経済交流は日本と中国に偏重していましたが、欧米のひと・もの・情報が本格的に流入し、欧米列強が朝鮮の運命に影響力を及ぼすようになりました。開港以降、朝鮮は多元的国際交流のための第一歩を踏みだしたのです。しかし日清戦争と日露戦争を経ながら、朝鮮は東アジアの覇者になった日本へ一方的に従属する関係になりました。

(2) 帝国主義時代の国際環境

国際関係は外交軍事的次元での平和―対立―戦争、そして政治的次元での対等―従属―支配と分けてみることできます。開港前の朝鮮は中国と不平等な事大関係を、日本と平等な交隣関係を結んでいました。中国との不平等な朝貢冊封関係は朝中間の平和を長期間もたらし、新羅が唐の朝鮮半島に対する支配企図をくい止めた六七六年以降には朝中間には戦争がありませんでした。滿蒙勢力がたびたび朝鮮半島を侵攻しましたが、元、続いて清の成立によって滿洲での独自の政治勢力が消滅してから、そのような葛藤がなくなりました。一五九二年に侵略した日本の大軍が

完全に撤収した一五九八年以降、そして清の大軍が侵略した一六三六年以降から一八七四年日本の台湾出兵までの二世紀以上の間は東北アジア三国間には小さな軍事的衝突もない完全な平和の時代でありました。

朝鮮は地政学的位置によってヨーロッパ列強の開放圧力を遅く受けました。それで、残念なことに、朝鮮は帝国主義時代の成立した時点において門戸を開放しました。万国公法の秩序は不平等な朝貢冊封体制を動搖させ水平的な外交関係への期待を生みましたが、帝国主義による植民地支配体制が成立しました。朝鮮政府は自強を図らなくては万国公法に頼っても列強による弱小国の主権侵害を止めることができなかつた現実を知らないわけではありませんでした。一八八一年、日本を視察した魚允中は新たな世界秩序が春秋戦国時代より熾烈に争覇する大戦国時代であり、その中で国を保存するためには富国強兵策を追求しなければならぬと報告していました。

朝鮮が自主的近代化に成功せず植民地へ転落させられていったのは、近代化力量が弱かつた反面国際環境が苛酷であつたためであります。朝日修好條規は不平等條約であり、條約の不平等性はますます強まりました。朝鮮の国際條約

の不平等性は日本のそれより苛酷であり、中国のそれと比べても決して引けを取らないものでした。中国、日本及びロシアは朝鮮の政治的支配までも狙いました。帝国主義時代が成立する中、中国は朝鮮との儀禮的性格の朝貢冊封関係を實質的な支配従属関係へ転換しようと図りました。中国は日本の一八七九年琉球合併に刺戟され、朝鮮に対して積極的に介入する考えをかため、一八八二年の壬午軍乱を契機として朝鮮の外交と内政の自主性を侵害しました。この中国の圧力が條約の不平等性を深めた重要な要因でありました。日本は壬午軍乱に対する中国の介入を契機として朝鮮を巡る中国との対決路線を決め、一八九〇年には総理大臣が利益線である朝鮮を守ろうとする施政方針を提示するに至りました。⁽¹⁾一八八〇年代中葉以降、ロシアの朝鮮進出は欧米列強を刺戟し、帝国主義的対立を觸発しました。朝鮮の自主的変革を挫折させた最大の外圧が中国と日本の競争的な介入であつたとすれば、それは開港から六年の後に表面化したのであります。日清戦争は朝貢体制を崩壊させたと同時に、日本の朝鮮支配過程での障害物を除去するものでもありました。

一八七四年の日本の台湾出兵から一九五三年の朝鮮にお

ける終戦までは東北アジアの歴史の中で最も熾烈な対立が長期間に亘って持続した時期でありました。この頂点の事件は一九一〇年における日本の朝鮮併合と一九三〇～四五年の間における日本の中国侵略戦争でありました。日露戦争からは欧米列強も東北アジアの運命が懸かる戦争に関与するようになりました。

表1によれば、帝国主義時代において朝鮮の貿易が急成長し、この中で日朝貿易が圧倒的な比重を占めていました。日本と植民地の間には、世界に例のないような貿易の膨張¹²がありました。そのなかで植民地に日本の資本財も多量供給されるに至りました。これは日本資本の大量の流入と結んで朝鮮の工業化をもたらししました。

(3) 一九四五年終戦後の国際環境

一九四五年の終戦以降、帝国主義体制が解体すると同時に国家主権を尊重する国際環境が作られて、朝鮮は独立しました。一九四五年終戦と同時に資本主義と社会主義との体制対立局面が成立する中、朝鮮は南と北に分断されました。一九五〇～三年の間の戦争は分断を固定化させました。

開港以降の東北アジア国際環境で、近代世界への編入に

次ぐ重要な要素は二〇世紀前半までの帝国主義体制、そして二〇世紀後半の社会主義体制でありました。これらの体制は近代世界の派生物とみなされることができません。資本主義国家の対外膨張欲が帝国主義時代を生み出し、資本主義体制を克服するために出現した社会主義体制は二〇世紀末から消滅してきたからであります。第一章で説明した第一段階と第三段階が近代化論的観点であるとしますと、第二段階は帝国主義批判の観点であり、社会主義的観点にも関わります。ここでは議論の単純化のために社会主義体制を扱わず、解放後については南朝鮮＝韓国を中心に探ってみます。

解放後の韓国にとって米国は一八七六年以前の中国と同じ位相をもつ先進国としての学習の対象でありました。中国との外交関係は兩國間不可侵のために必要であった反面、米国の外交関係は社会主義国との軍事的対峙を支援するのに必要でありました。経済的に中国は朝鮮に必要な物品を輸出する存在でありましたが、米国は重要な輸入先であるだけではなく比重の高い輸出市場も提供するようになりました。

解放以降、韓国は一九五〇年代までは日本の経済的影響

力から脱するために努力しましたが、一九五八年から経済援助が減る中で経済発展を成し遂げるためには日本の資本・機械・部品を必要とすることを認識するようになりました。そこで、日本との協力で経済発展を図ろうとする朴正熙政府は、日本の影響力から脱しようとする社会勢力の反対を抑えて、一九六五年に日本との国交正常化を推進しました。その後、経済発展によって政府の選択がよかったという認識が次第に広がって、二〇世紀末には一般的になりました。日韓国交正常化の一九六五年を起点として韓国の最大輸出国は日本から米国へ変わり、最大輸入国と最大資本導入国は米国から日本へ変わりました。一九六一〜九五年の間、日本から導入された長期資本は総額一三三億ドルでありましたが、総貿易赤字総額は一一〇二億ドルでありました。

二〇世紀末における社会主義国家の開放政策又は崩壊、そして世界化 (Globalization) 時代の到来は韓国の国際環境を変革しました。韓国は社会主義国家であった中国・ロシア・北朝鮮との経済交流を拡大しました。一九九二年の韓・中修交以降、両国間の経済交流が急激に拡大した結果、二〇〇四年に中国は韓国の最大交易国へ浮上し、海外投資

対象国の首位も二〇〇二年に米国から中国へ移りました。

表1に示されるように、二〇世紀後半における日本と米国の合わせた貿易額の比重は下落する趨勢であります。一九五〇〜八〇年代には米・日が貿易額の過半を占める程、韓国の経済交流は米・日中心でしたが、一九九〇年代からは社会主義国だけに止まらず、それ以外のヨーロッパ・東南アジア等との貿易が特に急速に増加しました。このような韓国の多元的な国際交流の進展は、国際環境の変化のみならず経済発展をなし遂げた韓国の海外進出能力の向上にもよるものであります。

三 国際環境と歴史発展

福沢諭吉は精神を文明の核心的要素とみなしましたが、今日の学説からみれば、技術と制度が文明の水準を決めます。精神は文明発達の副次的要因とみられます。今日の経済学界は経済発展の地域間格差を生む中心的要因を地理、貿易及び制度と把握しています。⁽¹³⁾ 貿易は国際交流の中心的構成要素でありますので、国際環境は経済発達を決める重要な要因であるはずで、他人と交流しながら学んだり競争することが個人の発展にも重要であるように、国際交流

は国家の政治・経済等の発展に緊要であります。どの国家も必要な技術と制度をすべて作ることはできませんから、知識と情報の交流がない人類文明の発展は考えられません。資本主義が世界体制下の国際分業連関を通じて成立したとみるウォーラステイン Wallerstein の理論は国際関係が近代化を説明する本質的要素であったことを示してくれています。⁽¹⁴⁾

表1は二〇世紀における朝鮮経済の成長が貿易成長と関連があったことを示しています。貿易が急速に成長した開港期と植民地期では経済が成長し、解放直後に貿易の急激な萎縮と同時に経済も急激に後退し、高度成長期には貿易が急成長したのであります。

朝鮮は中世まで世界最高の先進文明を達成した中国に隣接する地政学的環境に助けられて先進的な国家体制を早く樹立しました。しかし中国は漢代以降経済発展が緩慢になって、中世において相対的に速やかに発展した西ヨーロッパに一六〇一七世紀前後に追い越されました。朝鮮も中国と同じく緩慢に発達して、日本と西ヨーロッパに追い越されました。一九世紀前半に朝鮮は一人当たり所得で世界の下位圏にありましたが、人口密度、文化・政治水準及び

社会的力量を考慮した文明の水準では中位圏に属していたようにみえます。

朴齊家は、一七七八年に執筆した『北学議』で、小さな半島国家である朝鮮が海上貿易によって富裕になることができたにもかかわらず、これを禁止したため貧しくなったといいました。朝鮮の海上進出は九世紀に活発でありましたが、一〇世紀から弱まり、一四世紀末には途絶えてしまいました。そして、近世ヨーロッパが技術発展、ひいては工業化で先頭に立った重要な要因を、政治的分裂によって新しい思考をする人々が中国やイスラム世界より一層頻繁に移住することができた⁽¹⁵⁾、国際環境に求める見解があります。東北アジアの閉鎖的な国際環境はヨーロッパに追い越された重要な要因であり、その中で最も閉鎖的かつ小さな朝鮮に最も深刻な打撃を与えました。ところで、日本の徳川時代には三都と領国で構成される縮小型世界経済が存在し、蘭学が成立しましたので、鎖国政策が深刻な打撃を加えはしませんでした。

なぜ朝鮮が近代文明の導入に遅れたのか。第一に、朝鮮は欧米人が接近しにくかった地理的位置にあります。第二に、朝鮮は朝貢体制に深く編入されましたため、朝貢

体制から離れた欧米人の貿易要求に否定的でありました。

第三に、華夷観念が強く、貿易利益の追求に消極的な朱子性理学の影響力が強かったことです。中国と国境を共有しましたので、朝貢体制に深く編入され、また儒学の影響力が強かったのです。そういった点で、朝鮮が近代文明の導入に遅れた要因は、主に国際環境に求めることができます。

その反面、開港以降、朝鮮において近代思想が速やかに導入され、一八八〇～四年の間に近代化政策が進展しましたが、これは近代文明を成功的に導入した日本が近くにあつて強い刺激を与えられたことに支えられています。しかし、第二章で説明しましたように、国際環境の苛酷さは朝鮮の自主的変革に不利でありました。

一九一〇～四〇年の間の経済成長率が年平均三%以上であつたことは明らかであります。そうすれば、この間に一人当りの生産は年平均一～二%増えたはずですが、これは当時、世界的に高い水準であり、近代経済成長の要件に該当します。朝鮮王朝時代の経済成長率は〇・二%程と推計されますので、植民地期の経済成長率が一〇倍以上であつたこととなります。⁽¹⁷⁾ところで、植民地化された直後から経済成長率が三%以上と推計されたことからみて、開港期（一

八七六～一九一〇）における貿易の急増、そして近代的思想・技術・制度の導入等によって近代的成長のための与件が整えられつつあつたのです。

植民地期、民族間所得格差が激しかったのですが、戦時統制期を除くと、朝鮮人の生活水準が下落したことはなかつたようであります。だが、目立つ向上をみせたものではありません。通説は大量米穀の日本への搬出によって朝鮮人の食生活が悪化したとみますが、各種食品消費からみて、一人当たりの総カロリー攝取量がほぼ変わらなかつたという見方もあります。未熟練労働者の賃金は停滞しましたが、熟練労働者の賃金は上昇する趨勢にありました。朝鮮人の身長があまり変わらなかつたという研究もあります。⁽¹⁸⁾植民地期における朝鮮の一人当たり所得は日本の半分或いはそれ以下でした。朝鮮總督府の調査によれば、一九三〇年に有業者人口の七八・五%が農業に従事しましたが、農家戸数の四八・三%が大麥が收穫される前の三～五月に食糧がなくなる春窮農家でした。朝鮮人中・下層の生活水準が困窮であつたのです。

ヨーロッパ人は、遠く離れており、また疾病等によって定着しにくい熱帯地方の植民地で、短期的利益の増大に注

力したために、制度の整備と投資に消極的でありました。⁽¹⁹⁾

これに比べて日本人は、氣候が定着するのに適しており、また日本帝国の防禦と擴張のための前哨基地として役立つ朝鮮に対して、一方では自治の封鎖、文化的抑圧等の強圧的な政策を行いながらも、⁽²⁰⁾他方では制度の改革と社会間接資本・工業の投資に積極的でありました。さらに日本資本主義が急速に膨脹したので、日本資本が大量に流入し、日本との貿易が急増しました。その結果、植民地期の経済成長率が高かったのです。

経済と生活水準は戦時統制期に後退し、表1に表れるように、解放後にはさらに急激に後退しました。それで、植民地近代化論に反対して「開発のない開発」という評価もあります。⁽²¹⁾分断と戦争が経済に対し深刻な打撃を与えましたが、一九五〇年代に米国の大量援助によって南朝鮮の産業設備が再建されました。韓国は高度成長を開始する一九六三年においても貧しい国であり、農林漁業が就業者の六三%、国内総生産(GDP)の四三%を占める農耕社会でありました。一九四〇年の鑛工業比重である一九・四%や、支出中の投資の構成比である一六・五%を回復したのは一九六五〜六年頃でありました。⁽²²⁾

先に言及しましたように、植民地期において日本人が工業資本の九割以上を所有し、高級人材の大部分を占めたが、これは朝鮮人の人的資本の蓄積を抑制して解放後の経済発展に対して不利でありました。そして朝鮮経済が日本帝国の一領域として編入されたことも経済後退のひとつの要因でありました。表1に表れていますように、植民地期朝鮮の貿易依存度が高かったのですが、その中で対日貿易の比重が非常に高かったのです。前者は世界市場への統合の進展としてとらえることができるかもしれませんが、後者は日本経済への従属深化とみるべきであります。以上の点で、解放後の朝鮮は近代的成長を持続する力量を調べていませんでした。長期的観点でみて、植民地支配による近代文明の移植は韓国の主体的な日本学習に比べて社会と経済の成熟にとつて有利であったとは思われません。このような仮説は解放後の政治的・社会的混乱と経済的後退に支えられています。

一九六三〜九六年の間は高度成長期でありました。一九七三年になって農林漁業従事者が全就業者の半分以下に減り、一九七八年から製造業の附加価値生産が農林漁業を超えました。一九七九年のOECD報告書は一〇個の新興工

業国 (NICs) を選んだ中に韓国を含めました。中村哲によると、韓国は一九六〇・七〇年代の発展によって中進資本主義国になりました。²³⁾一九八六～九年の間の好況期には外債累積問題が解消しました。

韓国人の生活水準の向上は大部分高度成長期に実現しました。マヂソン (A. Maddison) の推計等を参照しますと、一九九〇年国際物価で表示する朝鮮半島の一人当り生産 (GDP) は西暦紀元に変えた頃四五〇ドル程、一九〇〇年頃六〇〇ドル程でありました。前近代に一人当り生産はあまり増加しませんので、一九世紀以前の二千年間に二倍以上増えなかったようであります。それが一九一〇～四〇年の間に約六五〇ドルから約一二〇〇ドルに増えましたが、解放直後には大略一九一〇年水準に下がりました。一九五〇年代に大量の援助に助けられて経済が回復しましたが、一九六二年にも韓国は一人当り生産が一一二ドルに過ぎなかったほどに、貧しい国でありました。一人当り生産は二〇〇〇年に一万四三四ドルとなり、二〇世紀に二四倍程に増えましたが、一九六三～九六年の高度成長期だけで一人当り生産は一三倍以上しました。²⁴⁾

第二次世界大戦で帝国主義体制が崩壊して以降、世界経

済が繁栄する中で貿易自由化が進展し資本と技術が国家間で円滑に移動しましたが、戦後の経済発展はこのような国際環境に助けられました。一九四八年に出帆した韓国政府は民主的憲法を整えましたが、民主主義が定着したのは一九八七年以降でありました。経済発展だけではなく開放的国际環境下の先進民主主義国家との交流も政治発展をもたらした重要な要因でありました。

相対的にみて、一五世紀の朝鮮は国家体制・文化・科学技術などでは高い水準にありましたが、市場は低い水準にありました。朝鮮王朝時代に市場が成長しましたが、高い水準に至りませんでした。これは国家制度・文化・科学技術などの成熟に不利でありました。その反面、二〇世紀後半の経済発展は政治・社会の成熟のための基盤を調べました。一五世紀に市場が低い水準に止まった重要な要因は民間貿易の抑圧でありましたが、高度成長を実現させた重要な要因は対外志向的戦略でありました。²⁵⁾朝鮮王朝時代に海上貿易が禁止されたことは内陸志向的な中華世界の地政学的秩序に深く編入されていたためでありますし、二〇世紀後半における韓国の貿易国家としての発展は米国主導の世界秩序に深く編入されていることに支えられます。国際環

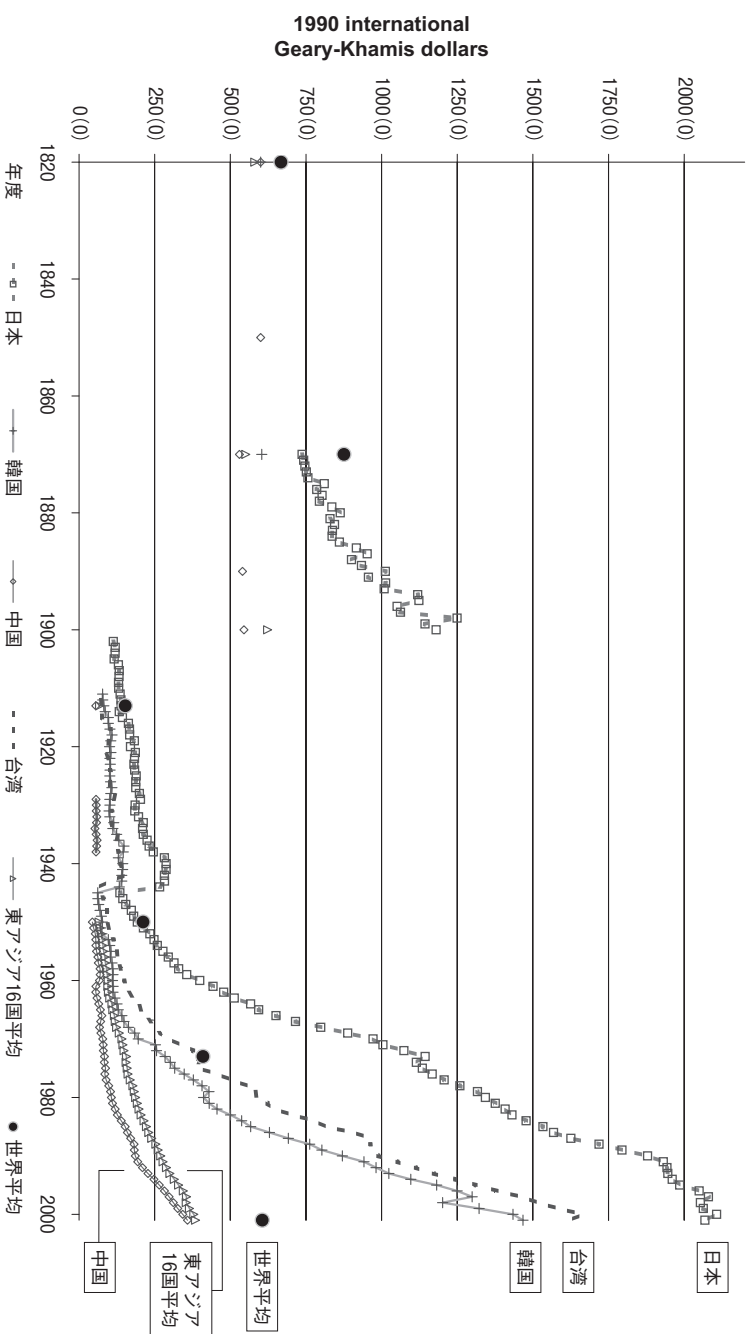
境とそれに対する国家戦略は朝鮮史の発展に重大な影響を及ぼしたのであります。

図1を通じて東北アジア国家間の一人当り生産（GDP）の格差をみてみましょう。これは所得格差を決めます。このマゼソンによる各国別一人当たりのGDPに関する推計は、二〇世紀前半までは時間を遡るほど正確度が低くなりますが、大体の推移を見るには差し支えません。徳川時代日本の経済的成果が中国・朝鮮を超えて、一八世紀から日本と朝鮮・中国の間には所得格差が拡大しました。一八八〇年代、日本が先に工業化に成功してから、その格差がより拡大して、一九一〇年代には日本の所得は朝鮮と中国の二倍程でありました。この格差は帝国主義時代に縮小されず、終戦直後には急速に拡大しました。それで、一九七〇年に日本の一人当りの生産は韓国の五倍で、両国間格差が最も大きくなりました。台湾は朝鮮より所得水準が少し高かったのです。中国社会主義の低い成果と韓国的高度成長によって朝中間所得格差も一九六〇年代から拡大して、一九九一年に韓国は中国の五倍に近づきました。しかし、韓国と中国の工業化が次々に進んだことにより、所得格差が縮小されてきました。一九九二年から韓国の一人当りの

生産は日本の半分を超えるようになりました。一九九二年からは韓国・中国間の所得格差が縮小してきました。以上でみると、昭和期は東北アジア国家間所得格差が最も大きく拡大した時期であると同時に、その末期にはこれが縮小する趨勢に転換したことを目撃した時期でもありました。これは基本的に工業化の時差を反映しています。

植民地期における中心的工業地帯が位置した北朝鮮は一九六〇年代まで南朝鮮より経済で優位でありましたが、一九七〇年前後南朝鮮に追い越されましたし、その後南北間格差が拡大する一方です。その主な要因は、北朝鮮が市場を廃止し、国家の強制による資源の動員に依存する発展戦略を採択したということです。これと関連するものとして、自力更生の自立的民族経済を確立しようとする戦略を追求して、国際的刺激を排除し、国際環境に能動的に対応することができなくなりましたが、これは北朝鮮の立ち遅れをもたらした重要な要因でありました。北朝鮮は一九七〇年代から徐々に改革・開放を追求しましたが、その政策が消極的であったため、実効を収めることができませんでした。²⁶冷戦体制下、軍事的に対峙した南・北朝鮮は同じく重化学工業化を推進しましたが、これは北朝鮮経済の沈滞をも

図1 1820-2001年、東北アジア国家間の1人当り生産(GDP)の格差



出所： Angus Maddison, *The World Economy: Historical Perspective*, OECD, 2003.
 注：1900年以降の目盛りはその前の10倍。

たらしめた重圧として働いた反面、後になって推進した南朝鮮では、軽くない副作用を生んだとしても、結局工業高度化に寄与しました。南朝鮮の成功は北朝鮮より丈夫な消費財工業の基盤の上で重化学工業化を推進し、北朝鮮とは違って輸出工業として育成したためであります。

一九五〇年には東北アジアの全ての国家において一人当り生産（GDP）が世界平均より低かったのが、一九五〇年代に日本が、一九七〇年代に台湾と韓国が世界平均を超えるようになりました。一九九〇年代から広大な中国が世界平均に急速に接近してきています。北朝鮮だけは一九七〇年代から世界平均から遠ざかっていきました。北朝鮮を除くと、二〇世紀後半に東北アジア国家はお互いに格差を縮小しながら世界的に高い経済的成果を収めたのであります。

顧みると、二一世紀に入った今日、東北アジアの人々が豊かに暮らしているのは有利な国際環境に助けられたためであります。中国は古代にすばらしい文明を作り上げ、周辺地域の文明水準を高めるのに貢献しました。一九世紀後半から日本が先に近代文明を発展させたことは周辺国家の近代化を促す結果となりました。一九世紀末から東北アジ

ア三国間の対立が激しくなりましたが、二〇世紀後半から東北アジア国家は共存共榮するようになりました。こうして文明力量を蓄積し平和的国際関係を築き上げた東北アジア国家は、二〇世紀後半における世界経済の大成長期をうまく活用することができたのです。

四 植民主義史学の半島性論に対する批判

植民地期、日本人の朝鮮王朝時代観を集大成した四方博士は「結論は、停滞性の一語に尽きる。」と言いました。朝鮮史停滞論を産んだ国際環境は半島性論で、その国際関係は他律性論で説明しました。朝鮮が「アジア大陸就中滿蒙及び支那本部と日本列島の間を介在する半島たることが、この民族の運命に宿命的とも謂うべき影響を及ぼして来た」と言いました。「極めて少数の例外（特に初代時代の）を除いて、常にイニシアチブをとるのは周辺国家であり、朝鮮側としては、之れを如何に順応し自己保存を全うすべきかに努力が集注せられた。」この「受動的消極的性格」から国是として事大主義が生成されたのである、と。以上は四方博士の独特な見解ではなく植民地期における日本人識者層の共通する見方でありました。

解放後、朝鮮史停滞論を否定する研究成果は多方面で提出されましたが、地理決定論に対する拒否意識は国際環境又は地政学的環境に対する関心を奪いました。地理又は地政学が国家運命を完全に決めるとはいえませんが、これに重大な影響を及ぼしたことは満蒙及び支那本部と日本列島と言っても差し支えありません。日本が独自の海洋勢力として成長してきたこと、そして滿洲が終局的に中国に吸収されたことは地理によって決まったといっても過言ではありません。朝鮮が地理環境に「順応し自己保存を全うすべきに努力が集注せられた」ことはおかしくありません。むしろ周辺強大国の中で独立国家を維持して独自の文化を發展させたことは評価すべきであります。事大主義は強大国であった中国と国境を共有する朝鮮の不可避な戦略であり、中国との長期間平和を実現した合理的選択でもありません。

朝鮮の芸術に深い愛情をもっていた柳宗悅は、一九一九年読売新聞所載の「朝鮮人を想ふ」で、「強大な粗暴な北方大陸の漢民族」と日本の武士による「絶えなく襲ふ外寇」は朝鮮史の「忍ぶのに苦しい運命」であったとみましました。²⁸今でも日本と中国に挟まる地政学的環境を不幸と思う朝鮮

人が多いのですが、私はそう思いません。

一八八二年朝鮮の軍乱から一九五三年朝鮮戦争の休戦までは、地政学的環境は朝鮮の歴史に苛酷な試練を与えました。一八八二年軍乱に託けて中国軍隊が朝鮮に駐屯し内政に干渉するようになりました。一八八二〜九四年の間は、中国と日本という兩大勢力の対決が朝鮮の運命を左右した唯一の時期でありました。一九五〇〜三年の間の朝鮮戦争は世界大戦のようなものでありました。しかし一八八二年以前には朝鮮に対する外侵が特に多かったものではありません。六七六年以降、朝中間には一回の戦争もありませんでした。九九三年以降滿蒙勢力との戦争はたびたびありましたが、清の中原支配以降そのようなものはありませんでした。この北方勢力が弱かったときは朝鮮を侵略することが難しく、強かったときは朝鮮より広大な中国を狙ったので、朝鮮に対して深刻な被害を与えたことは少なかったのです。日本海賊の侵略は長期に亘りましたが、日朝間の全面戦争は六六三年と一五九二〜八年の間だけでありました。朝鮮半島における王朝の壽命が長かったのですが、その重要な要因の一つは朝鮮半島の支配を狙った外侵が多くなかったということです。朝鮮王朝時代の長期にわたって、

内乱がなく、中華秩序が国際的に平和を提供しましたが、このような内外平和体制に安住したことが軍事力と税源集を弱めて、一九世紀後半の帝国主義時代での対応に差し障りを招きました。それに反して一八八二年の軍乱から一九五三年の休戦までの苛酷な試練期において、朝鮮人は、戦国時代から生き残った日本人のように、それ以降の時期に積極的に対応できる強靱さを養いました。歴史の中で単純に理解しにくかった事実は少なくありません。

朝鮮は古代国家の成立から今日まで世界平均以上の文明を達成しましたが、これは国際環境に助けられたためでした。古代と中世において、朝鮮は世界的に先進的な中国文明の伝播からの利益を享有しました。朝鮮はヨーロッパ文明に対する拒否意識が特に強かったのですが、一八八〇年以降の近代的变化は速い方でした。朝鮮が中国の先進文明を熱心に学習しながら文明の力量を養ったことは、結果的に近代の科学技術と制度の吸収を助けることになりました。そして朝鮮に先立って近代化に成功した日本が地理的に近いことは朝鮮の近代化に利点でありました。一八八〇〜四年の間、近代化政策への迅速な転換は日本の刺戟に支えられたものでした。一六世紀以降、ヨーロッパ文明のインパ

クトに対して日本が最も積極的に対応しましたが、日本が欧米を除いて最も早く近代化に成功したことは、中国文明を吸収しながら蓄積した文明力量に支えられたからです。

一八八二年の軍乱から一九一〇年の亡国まで朝鮮は大陸勢力と海洋勢力の間に挟まって「忍ぶのに苦しい運命」に置かれました。一八八二年以降朝鮮の支配を巡る中国、日本及びロシアの競争的介入は朝鮮政府の近代化努力にとって不利でありました。この強烈な経験が植民地期における国際環境観を規定したのです。これからはこのような歴史の一面で生成した観念から離れる必要があります。朝鮮の地政学的環境は自主的近代化に不利でありましたが、開港以前の二千年以上に亘る中国との交流による文明力量の向上が近代文明を受け入れる能力を培養したこと、そして開港以降の長期に亘って隣接した日本が近代化のための刺戟を与えたという利点もあります。近代化の全過程を見ますと、後者の利点の方が前者の不利より大きかったと思われれます。日朝間に歴史的に大変な時期もありましたが、中国のみならず日本も隣国であることが朝鮮にとってよかったのです。

南北分断後、南朝鮮が最先進国であり大きな市場である

米国の主導する世界秩序に深く編入されたことは経済と政治の発展に都合のよい環境を提供しました。米国だけではなく、隣接する日本からも資本を導入し、先進的な技術と制度を学習することができました。韓国は日本の資本財・部品・素材を輸入して製品を作り、米国へ輸出するようになりました。韓国が二〇世紀後半に歴史上最も刮目すべき経済発展をなし遂げたことは特に友好的国際環境に助けられたからです。一九六〇年代以降の経済発展は政治と社会の発展をもたらす物的基盤をつくりました。

二〇世紀末、中国の工業化が進むにつれて、競争力を喪失する韓国の中小製造業が続出しました。それで、韓国は高級技術産業では日本に、中低級技術産業では中国に圧倒されて、まるでナツククラッカー nutcracker に挟まれる存在であると悲観する人もいますが、先進国である日本と最も躍動的に成長する中国とが提供する利点がそのような不利な点を超えるという見方が支配的であります。国際環境の利点をどれほど享受できるかは朝鮮人の努力如何によるものなのです。

以上からわかりますように、植民地期の通念とは違って、農耕の成立からの全歴史からみて、全般的には南朝鮮は国

際環境の恵みを享有しました。ところで、今でも苦難に処している北朝鮮の人民にとっては分断と冷戦を生み社会主義への選択を誘導した国際環境がよかったといえませんが、北朝鮮をもとに考慮する、国際環境の総合的評価は難しい課題であります。

それでは、東北アジアにおいて常にイニシアチブをとるのは周辺国家であり、朝鮮は受動的に順応してきただけであつたのでしょうか。前近代には中国が、近代には日本がイニシアチブをとり、朝鮮がそれほどの役割をしなかつたことは明らかです。けれども東北アジアにおける朝鮮の役割は無視できるようなものではなかつたと思われま

第一に、東アジアの高級文化は大部分中国を発祥地としましたが、朝鮮は日本と同じく中国文化をよく吸収しながら固有の文化を創出して東アジア文化の多様化と豊饒化に寄与しました。朝鮮半島と満洲の東夷族は青銅器時代から中華文化圏とは違う独自の文化圏を作り上げ、朝鮮人は言語・衣食住等で固有の文化を維持してきました。⁽³⁰⁾二〇世紀末の韓流も東アジア文化の多様化の一助になるであります。

第二に、朝鮮は先進文明の伝播者としての役割を果たさ

なかったわけではありません。朝鮮は大陸の高級文明を消化して日本に伝達して、日本古代文明の成立に寄与しました。一五九二〜八年の間に朝鮮を侵略した日本軍は陶工・印刷工などを連れて行きました。一七世紀には朝鮮通信使が日本に性理学を伝授しました。二〇世紀末には中国に先立って新興工業国となった韓国の開発経験と資本と技術は、中国の工業化の一助となりました。

以上からわかるように、全体的にみると、三国が互いに交流しながら東アジアの文明の多様化と発展を生んだといえます。三国間文化交流の効果が特に大きかった時期は、中国の古代文明の伝播に助けられて朝鮮と日本に古代文明が形成された時期、近代文明を成功的に導入した日本の刺戟が初めて本格的に伝えられた一八八〇・九〇年代、そして二〇世紀後半における三国間経済交流の発展期であると思われまゝ。古代には東北アジア地域間に国境を越え海を渡って人々が活発に移動しましたが、これは朝鮮と日本の大陸先進文明の吸収に寄与しました。中国は明代においてヨーロッパに追い越され、朝鮮は朝鮮王朝時代において日本に追い越されたとみえますが、その一つの要因として対外的に消極的乃至閉鎖的になった点を挙げることができま

す。一九世紀の門戸開放以降、ひと、かね、もの及び情報の交流が一層拡大したことによって、欧米との格差を縮小することができたのです。

朝鮮の運命は大陸と日本の影響を受けましたが、朝鮮が兩國の運命に影響を及ぼさなかったわけではありません。朝鮮は地政学的位置に因って東北アジアの平和を支える支柱の役割を果たしました。今まで東北アジア三国の介入した国際戦争が四回ありましたが、全てが三国の運命に重大な影響を及ぼしました。第一回の東北アジア三国間の国際戦争は、六六三年に日本・百済の連合軍と、新羅・唐の連合軍の間に起きた白村江の戦いです。ここで百済の命運が尽き、続いて新羅と唐の連合軍は高句麗を滅亡させました。その後には唐は新羅を支配しようとしたましたが、その企図は挫折させられました。もし唐が新羅も滅亡させ中国が朝鮮半島全域を支配するようになったとすれば、日本の安全ないし自主が危なかったかもしれませぬ。その反面、高麗が蒙古に七〇年間抵抗した後に屈服しましたので、蒙古は高麗の物資を徴発し高麗の軍隊を連れて一二七四年と一二八一年に日本を侵攻しました。この侵攻は失敗しましたが、鎌倉幕府の没落をもたらししました。もし高麗が蒙古に最後

まで屈服しなかったとすれば、蒙古の日本侵攻がなかったはずで、一五九二年に日本が仮道入明の名目で朝鮮に出兵して、朝鮮は七年間三国の激戦地になりました。この第三回の東北アジア国際戦争で、日本軍が朝鮮半島に止められましたので、戦争は中国に拡大しませんでした。けれどもこの戦争は明清交替の重要な要因となりました。一八九四年朝鮮で起きた中国との戦争で勝利した日本は朝鮮を併呑し、その後、銃剣を中国に向けるようになりました。歴史は、朝鮮半島における自主独立国家の存在が東北アジアの平和に必要であることを証言しています。

おわりに

朝鮮と日本は地理的に近いです。ところで、心の距離は近かったこともあるし、遠くなったこともあります。古代国家の成立期まで半島と列島の交流は活発でありました。これは西暦紀元前四〇〇〜紀元後七〇〇年の間に一〇〇万名ほどが日本に渡来したとする埴原和郎の推計からよくわかります⁽³⁾。

しかし、古代国家の成立によって国境が生み出され、国家間の外交的・軍事的緊張が発生してから、相互交流が制

限され心の距離が生まれました。ヨーロッパ近世においては国民国家の成立が海上交通の安全を保障して交流を促進しましたが、東北アジアにおいては海禁体制でそのような効果が現れませんでした。一四世紀後半の日本海賊の頻繁な襲撃、そして一五九二〜八年の間の日本大軍による朝鮮侵攻は日本に対する否定的感情を植えつけました。一七世紀には朝鮮通信使の派遣が日本の朝鮮に対する関心を高めました。

明治維新直後、兩國の間に外交的葛藤がありました。一八八〇年における朝鮮官僚の日本視察以降、朝鮮は歴史上初めて日本を先進文明として学習しようとなりました。ところが、明治維新に倣って試みた一八八四年の甲申政変が失敗し、また一八九四年に中国が日本との戦争で負けましたので、日本では朝鮮と中国を蔑視する観念と共に脱亞入欧論が台頭しました。続いて日本は朝鮮を併合し、その後中国に侵攻しました。それに対する反撥は激しいものでした。東北アジアが近代世界に編入されて以降、技術発展と制度変革によって物理的距離は一層近くなり国際交流が活発になりましたが、帝国主義の時代において心の距離は遠くなりました。

一九四五年解放の後に朝鮮の反日感情が表面化しました。これは政治外交的問題と絡み合って増幅しました。⁽³²⁾朝鮮人の反日感情は日本人の朝鮮人に対する嫌悪感を生み出しました。その中で、两国関係の反転のための契機が調いました。一九六五年の日韓国交正常化以降、两国間の経済交流が拡大するのに伴って、两国人間の交流が活発になりました。高度成長期における韓国の経済発展、一九八七年以降の民主化の進展に支えられて、韓国人は過去の心の傷から抜け出して日本を再評価し两国関係を冷静に省察できる心の余裕を持つようになりました。日韓間の人的・物的交流の活発化は日本文化の流入を伴いました。日本人も韓国の経済・政治発展と韓流文化をみて韓国に対する関心を高めました。これは古代国家形成期と一七世紀の朝鮮通信使の時代に次ぐ歴史上第三番目の関心であるといえます。これらの三つの時期において全て文化の交流が行われましたが、文化の交流は心を動かすのです。

一九九〇年代からは日・韓の民間人の交流が一層活発になり、二一世紀に入って两国民はお互いに心を開くようになります。経済的交流に次いで文化的交流、さらに心の交流に進んだのです。今は、古代国家の成立以前にあつたよ

うな、心の近い関係に戻りつつあると思われる。日朝間にはまだ重大な問題が残っていますが、歴史の車輪は方向を定めているようにみえます。交流の深化という歴史の流れが重大な問題の賢明な解決を誘導するように希望しています。

本企画の対象である昭和期は二〇世紀の中央にあつてその過半を占めます。昭和期は東北アジア歴史上最大の激変期でありました。第二章で言及しましたように、昭和期は東北アジア国家間の対立が最も熾烈な時代から平和的交流の時代へ転換することを目撃しました。戦前の昭和期より戦後の昭和期において各国の政治発展だけではなく経済発展の成果も目覚しいものがあります。対立と戦争の国際環境より平和的交流の国際環境が経済発展に有利であることはいうまでもありません。そして二〇世紀前半の戦争により東アジア人が受けた苦痛を考えますと、二〇世紀後半における平和的交流の意義が一層貴重であることが解ります。

人的・経済的交流の進展が平和の促進剤という「マンチェスター信条 (the Manchester creed)」が一九世紀中葉からイギリスで台頭しましたが、その証拠は確実ではないと評価されています。⁽³³⁾この理論は一九四五年以前の東北アジア

の経験とは相反します。一六世紀後半国際貿易の活性化によって形成された、貿易利益を掌握しようとする動機は、秀吉の一五九二年朝鮮出兵をもたらした一つの要因であります。東北アジアが門戸開放で近代世界に編入されて以降、経済交流が活性化したのと同時に軍事的対立がますます熾烈になりました。しかし、二〇世紀後半における経済交流の深化は戦争の機会費用を高めて紛争を抑制する力として働いています。東北アジアの経済交流が一層成熟した二〇世紀後半の段階で初めてマンチェスタ理論がよく当てはまるようになりました。そして、二〇世紀前半における戦争の惨禍が歴史的教訓として作用しているのです。

二二世紀には東アジア国家間にひと、もの、かね及び情報の交流だけではなく、こころの交流も一層進んで、恒久的平和体制が構築されることを希望します。各国の政治的・経済的・社会的発展はそのような与件を成熟させています。こころの交流を進展させるためには、最も熾烈な対立があつた時代から和解と協力の時代へ転換した昭和期についての歴史的省察が必要であると思います。

(1) 吉野誠『東アジア史のなかの日本と朝鮮』(明石書店、

二〇〇四年) 二三九～二四〇頁。

(2) 田中正俊『中国近代経済史研究序説』(東京大学出版会、一九七三年) 二六八頁。

(3) 張圭植『日帝下韓国基督教民族主義研究』(ソウル・ハアン(혜안)、二〇〇一年) 一一六～七頁。

(4) 植民地期朝鮮に関する研究の動向に対して、李憲昶『韓国経済通史』(法政大学出版局、二〇〇四年)、第七章第一節を参照せよ。

(5) 李大根編『韓国資本主義論』(ソウル・カチ(카치)、一九八四年)。

(6) 溝口敏行『台湾・朝鮮の経済成長』(岩波書店、一九七五年)、徐相喆(Sang-Chul Suh), *Growth and Structural Changes in the Korean Economy, 1910-1940*, Harvard University Press, 1978.

(7) 溝口敏行・梅村又次編『旧日本植民地経済統計—推計と分析—』(東洋経済新聞社、一九八八年)、金洛年編、文浩一・金承美訳、尾高煌之助・斎藤修訳文監修『植民地期朝鮮の国民経済計算 1910-1945』(東京大学出版会、二〇〇八年)。

(8) 李榮薫「民族史から文明史への轉換のために」(『国史の神話を超えて』ソウル・humanist、二〇〇四年) 四三～四頁で、朝鮮史停滞論の元祖として批判された福田徳三に対して、初めて朝鮮史を文明史の視角で研究したと評価した。

(9) Moses Abramovitz, "Catching up, forging ahead and

- falling behind". *Journal of Economic History* 46(2), 1986.
- (10) Erez Manela, *The Wilsonian Moment: Self-Determination and the International Origins of Anticolonial Nationalism*, Oxford University Press, 2007.
- (11) 芝原拓自『日本近代化の世界史的位置』(岩波書店、一九八一年)第六章。
- (12) 堀和生編著『東アジア資本主義史論Ⅱ』(マネルヴァ書房、二〇〇八年)総論。
- (13) 地理的條件に規定された文明の伝播が世界各地の発展に及ぼした深大な影響に対しつは Jared Diamond, *Guns, Germs and Steel: The Fate of Human Societies* (New York: Norton, 1997) を参照せよ。 Daron Acemoglu, Simon Johnson, and James Robinson, "The Rise of Europe: Atlantic Trade, Institutional Change and Economic Growth", *American Economic Review* 95, 2005 はヨーロッパが先に近代化を達した重要な要因が貿易の成長であることの実証を図った。
- (14) Immanuel Wallerstein, *The Modern World System I*, New York: Academic Press, 1974.
- (15) Deirdre McClosky, "1780-1860: a survey", *The Economic History of Britain Since 1700*, Vol. 1, Cambridge University Press, 1981 (Reprinted 2000), p. 270.
- (16) 李憲昶「前近代商業に関する比較史的視点」(『東アジア専制国家と社会・経済』青木書店、一九九三年)二二六―二七頁。
- (17) クズネット (Simon Kuznets) によれば、近代的成長率は一人当たりの所得の年平均均二%と人口での一%を合わせると三%程で、これはヨーロッパにおける中世初めから一九世紀までの成長率より一〇倍ほど高くなる ("Modern Economic Growth: Findings and Reflections", *American Economic Review*, Vol. 63, No. 3, 1973)。
- (18) Mitsuhiko Kimura, "Standards of Living in Colonial Korea: Did the Korean Masses Become Worse off or Better off under Japanese Rule?", *Journal of Economic History* Vol. 53, No. 3, 1993. 許粹烈「開發のなかつた開發」(ソウル・ウンヘンナム(弘徳大学)、『二〇〇五年』)・朱益鍾「民間人消費支出の推計」(金洛年編、前掲書)・チョイスンジン(최승진)「植民地期における身長變化と生活水準」(『経済史学』第四〇号、二〇〇六年)・車明珠・李宇衍「植民地期朝鮮における賃金水準と構造」(『経済史学』第四三号、二〇〇七年)。
- (19) D. Acemoglu, S. Johnson & J. A. Robinson, "The Colonial Origins of Comparative Development: An Empirical Investigation", *American Economic Review* 91, 2001.
- (20) 日本が文化抑圧政策を推進したことは、文化水準の格差が大きくなかつた植民地を支配し、さらに同化しようとしたからであると考えられる。
- (21) 許粹烈、前掲書。
- (22) 金洛年編、前掲書、二九六頁。

- (23) 中村哲(安秉直訳)『世界資本主義と移行の理論』(ノール・比峰出版社)第一章。
- (24) Angus Maddison, *The World Economy: Historical Perspective*, OECD, 2003; Hun-Chang Lee, "When and how did Japan catch up with Korea? — A comparative study of the pre-industrial economies of Korea and Japan." *CEI working paper series*, No. 2006-15, Hitotsubashi University.
- (25) 対外志向的戦略を推進した一九六三年から輸出拡大が産業生産の増加に大きく寄与したことは究明されていた(李憲昶, 前掲書, 五五七頁)。
- (26) 李憲昶, 前掲書, 第一二章。
- (27) 四方博「舊來朝鮮社會の歴史的性格に關して」(『朝鮮學報』第一〜三号, 一九五一年・一九五二年)。
- (28) 柳宗悅選集4『朝鮮とその藝術』(春秋社, 一九七二年)四〜五頁。
- (29) ハンヨンウ(한영우)『新たに探すわが歴史』(ソウル・経世院, 一九九七年(二〇〇六年))七〇〜四頁。
- (30) John K. Fairbank, Edwin O. Reischauer, and Albert M. Craig, *East Asia: Tradition & Transformation*, Boston: Houghton Mifflin, 1978, pp. 309-310.
- (31) 植原和郎『日本人の成り立ち』(人文書院, 一九九五一年)。
- (32) デミョンガン(지명관)『韓日關係史研究』(ソウル・小花, 二〇〇四年)。
- (33) Geoffrey Blainey, *The Cause of War*, London: Macmillan Press Limited, 1973.
- [付記1] この特別な講演の機会を与えていただいた大阪経済大学日本経済史研究所の本多三郎所長に感謝を申し上げます。日本文原稿執筆に当たり、徳成外志子先生と梁炫玉先生のお力を借りました。ここに記して感謝申し上げます。大島真理夫大阪市立大学教授、徳成先生などの論評に対しても感謝いたします。
- (本稿は、二〇〇八年七月二六日、日本経済史研究所主催「黒正塾 第一〇回寺子屋」の講演原稿に手を加えられたものです。編集委員会)
- [付記2] 一九四五年の解放以降、朝鮮半島に対して日本と北朝鮮では朝鮮と呼びますが、南朝鮮では韓国と呼ぶようになりました。このように呼称が異なるようになった経緯についてまず話しておきます。朝鮮の呼称は朝鮮半島の北部と満洲一帯に存在した最初の古代国家であった古朝鮮(紀元前一〇八)から、韓国の呼称は紀元前後における半島の南部を三韓と呼んだことから由来します。朝鮮の最後の王朝名は朝鮮でありますし、植民地期における公式名称も朝鮮でありました。一三九二〜一九四五年の間には朝鮮という名称が使われたのであります。
- 以上より、韓国という呼称が使われた経緯をむしろ説明する必要があります。朝鮮時代の最後の王である高宗が一八九七年に大韓帝国を宣布しましたので、大韓帝国期(一

八九七〜一九一〇）にたいしては韓国と呼ぶこともありま
す。日本人は始めこの国号を使いましたが、植民地として
併合すると同時に朝鮮という名称に変更しました。そして
植民地化以前の朝鮮時代を李氏朝鮮時代と、或いは縮めて
李朝時代とも呼びました。日本人は今までこの呼称を使っ
ています。植民地期も朝鮮時代と呼ぶことができる日本で
は、これと区別するためには朝鮮王朝時代という呼称の使
用も勧奨すべきであります。

一九一九年の上海において民族独立を求め大韓民国臨
時政府が成立しました。解放後の南朝鮮政府はこの臨時政
府を継承してその国号を受け入れました。臨時政府が大韓
民国としたのは大韓帝国を継承したものの、政治体制を君
主制ではなく民主共和制と決めたからであります。ところ
で、左翼の解放闘争勢力は大韓帝国の継承意識がなかつた
ようで、朝鮮という呼称を使い続けました。それで、北朝
鮮の社会主義国家は朝鮮という国号を使いました。このよ
うに南北間に国号が異なるようになりましたので、日本人
も慣れてきた朝鮮という呼称を使い続けました。南の体制
が北の体制より優位であることがあきらかになってから、
最近日本で韓国という呼称も次第に広がったようにみえま
す。朝鮮王朝の前には高麗王朝（九一八〜一三九二）があ
りました。南と北が統一すると、高麗という呼称を使う
べきであるとする主張もあります。Koreaは高麗から由来
しました。もし一方的な吸収統一でなければ、統一国家の
呼称は高麗になるかもしれません。

私は朝鮮時代（二三九二〜一九一〇）、開港期又は開化
期（一八七六〜一九一〇）、大韓帝国期（一八九七〜一九一
〇）、植民地期又は日帝時代（一九一〇〜一九四五）という
用語を使い、一九四五年解放以降における南の国家を南韓
又は韓国と、北の国家を北韓又は北朝鮮と呼びます。これ
は南朝鮮における歴史学界の一般的な呼称の仕方でありま
す。開港期が近代世界への編入という世界的規定性を重
視する呼称であるとすれば、開化期はこれに対する主体的
対応を重視する呼称です。一般的に朝鮮人は日帝時代、日
本人は植民地期という呼称を使います。朝鮮人が日帝時代
と呼ぶのには日本帝国主義の支配という事実を忘れないよ
うにしようとする意識が反映されていると思われま

す。
南朝鮮に住む私は全時期の歴史を韓国史と通称しますが、
この日本講演ではこれを朝鮮史と通称します。ただし、解
放後の南朝鮮に対しては韓国という呼称を使います。そし
て日本で一般的に使われる植民地期（一九一〇〜一九四
五）という用語を採択し、その前の時期に対して朝鮮王朝
時代（二三九二〜一九一〇）と言う用語を使用します。

（い ほんちゃん・高麗大学校政経大学経済学科教授）